



続ニモンセン

江藤淳

北洋社

## 著者略歴

1933 年東京生れ。慶応大学英文科卒業。文芸評論家。  
東京工業大学教授。「季刊藝術」編集同人。

著書 『夏目漱石』『奴隸の思想を排す』『作家は行動する』『海賊の唄』『作家論』『日附のある文章』『小林秀雄』（新潮社文学賞）『西洋の影』『文芸時評』『アメリカと私』『犬と私』『続文芸時評』『成熟と喪失』『崩壊からの創造』『考えるよろこび』『漱石とその時代』（菊池寛賞）（野間文芸賞）『旅の話・犬の夢』『夜の紅茶』『アメリカ再訪』『一族再会』『批評家の気儘な散歩』『文学と私・戦後と私』『海舟余波』『フロラ・フロラヌと少年の物語』『決定版夏目漱石』『こもんせんす』『漱石とアーサー王傳説』他に『江藤淳著作集』（全 6 巻）『続江藤淳著作集』（全 5 巻）『江藤淳全対話』（全 4 巻）がある。

続こもんせんす

一九七五年十二月十日 第一刷発行  
一九七六年三月一日 第五刷発行

著者 江藤 淳

発行者 伊藤金吾

発行所 北洋社

東京都千代田区富士見二―二―一  
電話 (二六四)〇五五一 千一〇二  
振替 東京一三三二四三

印刷所 精興社

製本所 牧製本

乱丁・落丁本はおとりかえいたします  
© Jan Ego 1975

## 目次

## I

足るを知る

マダム・萩焼、ミセス・加賀友禅

日英お国くらべ

図書館の話

犬とバロック音楽

読書の秋、文庫本の秋

『戦艦大和ノ最期』

物真似の芸

お話のある絵

日本の合唱音楽

## II

58    53    47    42    37    32    27    21    16    11

窓の花

原稿用紙の話

“会議の心得”

貴ノ花と若乃花

川上・長島と『花伝書』

“紅茶キノコ”の流行

夏来る

この夏の軽井沢

### III

さまよえる原子力船

新聞だけがなんでもいえる国？

“フォニイ”全盛

65

70

76

81

86

92

98

104

111

116

121

春の光

“改革”疲れ

テレビ残酷物語

あるハプニング

人事の季節

#### IV

夏の底冷え

あきとき  
秋と秋

よく切れる電球、よく折れる鉛筆

“福祉”の幻想

経済成長と子供支配

幻滅を売る広告

## V

ジュリーの心

幻想の果て

ノーベル平和賞騒ぎ

フォード訪日は非

反対とイシヤキイモ

天皇とフォード大統領

“話し合いの伝統”

掃き納め

## VI

諸人、東奔西走して行方を知らず

“核のカサ”

イメージと大衆蔑視

241

選挙公害

246

ヴェトナムに懲りてナマスを吹くな

252

町奉行、ふたたび

257

社会党訪中団の愚挙

263

マヤグエス号事件の意味

268

佐藤元首相、逝く

274

われに返るか、自民党？

279

『緊張緩和』の夏

284

ウィンブルドンの日米協力

290

あとがき

295

装幀 著者自装

題字 佐野繁次郎

続  
こもん  
せんす







## 足るを知る

ラジオの音楽放送を聴いていると、いろいろな音楽批評家が出てきて、蘊蓄<sup>うんちやく</sup>を傾けた解説をしてくれるので、ためになります。

ところで、このあいだ、たまたまある人が、昔から音響効果のよいので有名なウィーン音楽堂で、オーケストラの演奏を聴いた話をしていました。それはさぞ楽しかったろうなあ、と思っていたところが、この人のいわく、振り返って上野の文化会館で聴くと、とてもウィーンのように豊かな、深みのある音にはならない、音がスカスカになってしまって、くらべものにならない、という。わたしはそのとき、「なにをいってやがるんだ、このコンコンチキめ」と思ったんです。

なにもウィーンの音楽堂や、この批評家に恨みがあるからではない。わたしの乏しい経験からいうと、上野の東京文化会館の大ホールは、少くとも戦後にできた演奏会場のなかでは、世界でも有数のいい会場だと思っていたからなんです。音響効果もなかなか優れているし、建築的にあって品格のある立派な建物です。

文化会館よりあとになりますが、一九六二年に出来たニューヨークのフィルハーモニック・ホー

ルというのがあります。ところが、これがまたひどい演奏会場でしてね、それこそ世界のあらゆる音響学者の意見を聴き、実験し、細かく計算し尽してつくったはずなのに、楽音と雑音が同じくらいの音で響くんです。のみならずなにを聴いても金属的な反響がする。どんなまろやかな室内楽をやっても、みんなキンキンした音になってしまう。

これにはアメリカ人もがっかりして、以後反響板を取りつけてみたりして、いろいろ手直しをしているようです。

なにもひとさまのものを悪くいうつもりはないけれども、わが上野の文化会館より悪いホールが、しかもアメリカのニューヨークに存在しているという実例としていうんです。誰が聴いたって、上野のほうがニューヨークよりいいに決っている。

それはウィーンの音楽堂はカーネギー・ホールと並び称される演奏会場で、おそらく世界最高のホールでしょう。ウィーンの人が誇りにしているのは当然だけれども、これはウィーンに行かなきゃ聴けないですね。

ところがわれわれは東京に住んでいる。昔なら日比谷公会堂だったけれども、最近ではいい音楽会が多いのは上野の文化会館でしょう。このホールはいかにも世界最高ではないかもしれない。しかしまた同時に、世界最低であるわけがない。

最高のものは、たしかに世界に一つは存在する。しかし最高のもののほかに、いいものもいくつかある。お金をかけなくても、いいものはいいし、お金をかけてもフィルハーモニック・ホールのようにうまくいかなかった例もある。いったい最高のもののほかはみんな悪いと考える考え方がま

ともなのか、最高のものは大変いいけれども、しかしいいものもいくつかあって、それはそれなりによい、と考えるのがまともなのか、そのところの考え方が問題だと思ふんです。

わたしはその音楽批評家が、ウィーンは最高だ、東京のものは最高でないから悪いという議論をしているのをたまたま聴いて、これは、よく日本の新聞などが使う論理だなと思った。完全なものをもって来て、自分の周囲とつき合せる。周囲は当然完全ではない。ほれみろ、不完全だ。不完全は悪だぞ、この悪にとりまかれていたい日本人はなにをしているのか、というあの論理ですな。

しかし、これは人間をみじめにし、不幸にする論理じゃありませんかね。人間が完全なものを手に入れることのできるチャンスなんて、極く少いんです。不完全なのがあたり前です。不完全なりによいものを少しでもたくさん持ち、それを大切にするのは、最高のものを一つ持っているのと同じくらい、まともなことではないでしょうか。だいたい足るを知る、自分の限界を知るといふことを忘れすぎるんじゃないませんか。

悪いものももちろんよくしたいけれども、努力したってあがいたって、出来ないものは出来っこないんです。それなら、出来る範囲のことをちゃんとして、そのことに満足したほうがいい。自分の持っているもののなかからよいものを見つけて、それを大切にし、誇りにしたほうがよい。最高のものの以外は、すべてダメというオール・オア・ナッシングの論理は、じつに貧乏つたらしい。しかも恨みがましくて、思い上っていて、不愉快きわまりない。

わたしはもちろんこの音楽批評家になんの遺恨があるわけではない。たまたまその言葉にひっかっただけですけれども、彼の論理のなかに、われわれのなかにもあるケチくさい精神、足るを知

って愉しむことを知らない精神の発露を見たように感じて、不愉快になった。

そこで、気をとり直して、ある新聞の第一面のコラムを読んだところが、また「コンコンチキ」になった。

ミュンヘンのオペラハウスが戦時中爆撃で壊された、そのとき、次の出しものはワグナーの『ニュールンベルクの名歌手』に決っていた。戦争が終ったのち、ミュンヘンの人たちは普通にこのオペラハウスを再建して、こけら落しに空襲で見られなくなったワグナーの『ニュールンベルクの名歌手』をやった。それにひきかえ、「この国」ではオペラをやるはずの国立第二劇場がまだできないのはけしからぬ、と新聞のコラムはいつている。

このこけら落しも、やはり一九六二年だったと思います。わたしは一九六一年の夏、たまたまこのオペラハウスを再建している最中にミュンヘンに行って、その話を直接関係者からきかせてもらった記憶があります。

そして一九六四年には、出来上ったミュンヘンのオペラハウスで、ほかならぬ『ニュールンベルクの名歌手』をこの耳で聴いた。それはまったくすばらしい演奏でした。

しかしそれと、国立第二劇場促進論とどうしてつながるのかわからない。ミュンヘン市民のオペラという伝統芸術を大切にしている気持と、われわれのなかにある同じような気持を対照させるというなら、オペラハウスをつくる議論ではなくて、日本人が戦後歌舞伎や、文楽を大切にしたかどうかという議論をしなければ、筋が通らない。

そうすると、われわれは大切にしたんですね。焼け跡にたった一つ残った東劇に通って、むさぼ